

31  
アルゼンチン

## 映画・タンゴ・サツカー

宇佐見耕一

## 評価される社会派映画

アルゼンチンでも映画は、長らく庶民の娯楽の代表の座にあった。ブエノスアイレスの繁華街ラ・バージェ街には多くの映画館が集まり、今でも週末には人気映画の上映館の前には長い行列ができることもある。最も観客が集まる時間は週末の夜八時以降で、その時だけ座席指定の前売を行う映画館も多い。

アルゼンチンでは映画を含めて劇場では夜の公演が普通であり、終了後人々はピザ屋などで遅い夕食をとって帰宅する。ブエノスアイレスではコレクティーボと称されるバスが二十四時間走っているし、市内の治安も比較的良好なので、女性でも一人で深夜にバスで帰宅することが可能である。さらに最近まで鉄道も二十四時間営業をしていたため、コレクティーボと併せて繁華街への庶民の足は深夜でも確保されており、そこにも夜の歓楽を支える基盤があったと

みることができる。

一般の映画館で上映される映画はアルゼンチン製と米国製が中心であるが、どちらかというところハリウッド映画のほうが人気があるように思える。とはいえ、アルゼンチン製映画の質は決して低くなく、海外の映画祭で入賞する作品も多い。特に一九八三年民政復帰以降には、「オフィシャル・ストーリー」、「タンゴ・ガルドの亡命」、「内なる債務」など軍事政権期の人権侵害やフォークランド戦争を批判した社会派の映画が、批評家のみならず一般大衆からも高い支持を得た。

しかし、アルゼンチンでの映画産業も他国と同様テレビ、最近ではビデオやケーブルテレビの普及により長期低落傾向にある。ブエノスアイレスでは国营、民放あわせて五チャンネルのテレビが視聴できる。ケーブルテレビで映画専用のチャンネルの他に、スペイン、メキシコ、チリ、ブラジルなど他のスペイン・ポルトガル語圏諸国の番組も見られる。また家庭用ビデオも急速に普及し、市内には至るところにレンタル・ビデオ店が出現している。こうした視聴覚メディアの多様化が映画館の入場者減少の主な要因と考えられる。映画館の方でも、高額な入場料が観客減少の原因であるとの批判に对应して入場料の引下げを行ったこともあった。しかしそれでも入場者減少に歯止めはかかわらず、アルゼンチン映画産業は危機的状态から脱しきれないでいる。

### 文化財化したタンゴ

映画産業と並んで不振の  
娯楽といえば、タンゴが

あげられる。タンゴの一般的な上演形態は、サン・テルモというブエノスアイレスの下町にあるタンゴ・バーでの深夜の上演である。夜十時頃から始まり、たいてい伴奏はピアノとバンドネオンのみで、それに歌手が加わるのが普通である。地元のタンゴ愛好家の通うタンゴ・バーはそうしたこじんまりとした所であるが、なかには、フル・オルケスタを備え、有名歌手を招き、さらにダンスを見せるタンゴ・バーもある。そうしたタンゴ・バーは当然のこととして料金も高く、観客のほとんどが外国人観光客である。

たまには市立劇場などの大きなホールでのタンゴ・ショーの上演もあるが、しょっちゅうではない。またテレビにも週に一度か二度タンゴを上演



ブエノスアイレスのタンゴ・バー

する番組があり、ラジオでも比較的多くタンゴがかけられている。

しかし、アルゼンチン国内ではタンゴはもはや国民の一般的な娯楽とは言い難い。若者の間ではタンゴは日常ほとんど聞かれなくなったし、サン・テルモにあるタンゴ・バーも平日にほとんど閑古鳥が鳴いていることが多い。

こうした国内での人気低迷に反して、外国でのアルゼンチン・タンゴの人気は上々である。そのため、著名な奏者や歌手は外国に生きる糧を求めて世界中を演奏旅行して生活するようになった。数年前にはタンゴ・アルヘンティノという名で演奏とダンスを組み合わせたショーが世界を公演してまわり、アルゼンチン・タンゴの世界的人気を大いに盛り上げた。日本も彼らにとつては大のお得意様で、著名な奏者・歌手の多くが来日している。

このようにタンゴの現況は、アルゼンチン国内では娯楽というよりも文化財化し、しかもその歴史的無形文化財の維持は海外の関心に依存するというところもとない状況にある。

### 階級を越えた

### 人気のサッカー

人気低迷にあえぐ映画やタンゴをよそに、プロ・サッカーは民衆の間で高い人気を保っている。日本でプロ野球の選手になるのが子供たちの夢であるように、アルゼンチンではプロ・サッカーチームの選手に憧れる。

試合は日曜日の午後開催されるのが普通で、二軍の試合が終わってから一軍の試合が行われる。プロ・サッカーチームのほとんどはブエノスアイレスかその周辺のサッカー場をフラン

チャイズとしているのだが、コルドバやロサリオなど地方都市をフランチャイズとするチームもある。

プロ・サッカーチームのなかで最も人気のあるチームが、高級住宅街ベルグラノ地区に本拠を構えるリバー・プレートと、下町でタンゴの発祥地ボカ地区を本拠とするボカ・ジュニアーズである。こうした対照的な本拠地をもつ両チームのファンは互いに強い対抗意識をもっているように見受けられ、リバー・プレート対ボカ・ジュニアーズの試合は伝統の一戦となっている。また、勝チームを予想するプロデと呼ばれる国営のサッカートカルチョがあり、これもサッカーの人気を盛り上げる要因となっているように思われる。

程度の差こそあれアルゼンチンも他のラテンアメリカ諸国同様、国民の所得格差が大きい。週末のラプラタ川には豪華ヨットの群れが広がり、世界三大オペラハウスのコロロン劇場でのオペラ公演は、ヨーロッパにいたるのではないかと錯覚させるほどである。他方、ブエノスアイレス郊外のビジャ・ミセリアと呼ばれるスラム街の住人は日常娯楽とは縁遠い生活を強いられる。そのようななかで、サッカーは階級を越えた国民的娯楽の代表の座を保っているといえるよう。

(うさみ こういち／アジア経済研究所地域研究部)